

を覚えるのである。母音だけでも日本語より多く、その違いを知るだけでもリスニング力向上の第一歩となる。正しい発音、英語の音を知ると、上で述べた音の連鎖、脱落、同化など変化する音に対応できるようになる。ディクテーションをやる際、穴うめできた単語はその音を知っていたから聴けたのであり、音を知らなければ当然聴けないのである。

ある程度のリスニング力のある人は、リスニングを聴くことに限定して学習することに加え、「推測力」を向上させる学習法も聴く力を養う上で実際的であると思われる。

リスニングは一見、受動的な学習であるように思われる。しかし、工夫次第では実際のやり取りを想定した上で、より実践的な学習に転換できる。ここでは、ただ音を聴くという受動的な姿勢から、自ら音を取りにいく能動的な姿勢を養う聴き方を提案してみよう。それは、「聴く」から「推測」への学習。私たちは普段、日常会話をする際、相手とのやり取りの中で、かなりの部分で話しの流れを半ば推測しながら聴いており、だからこそそのとき、うなずいたり、同感したりして態度に示すことができる。そうした行為をリスニングの学習のときに役立ててみる。例えば、あるまとまった英文を聴いたとき、ほとんど理解できなかったとしよう。まず、英文の中で聴こえた英単語を拾い、その単語を基に推測してそのストーリーを予想してみる。例えば話された英文で“Christmas” “bargain” という単語を聴き取ったとき、どのようにイメージするだろうか。プラスかマイナスか、明るいのか暗いのか、喜んでいるか怒っているかなど。そういったイメージだけでもよい。“Christmas” と聴けばプラスのイメージが浮かぶであろうか。寒いと感じるかもしれない。あるいは雪が降っていると考えるかもしれない。“Bargain” と聴いてマイナスのイメージをもつ人は少ないであろう。多くはプラスのイメージで推測できよう。要は、一般的な常識をはたらかせて聴くことである。ここで強調したいことは、自ら単語をつかみにいくことにより、能動的に聴

く態度を養い、実際的なコミュニケーションの場を想定して聴く姿勢である。聴くことは能動的な行為なのでリスニング学習を聴く学習だけに留めず、「推測力」を高める学習として取り入れたい。

以上、私的な経験を含めた語彙力の記憶法とリスニングの学習法を紹介した。少しでも学生諸君の英語学習の参考になれば幸いである。最後に、私たちは、日頃から「コミュニケーション」と一言で言うてはいるが、このコミュニケーションの行為は公私の場面を問わず最も難しいのではないかと痛感する。公的な場合は勿論のことであるが、私的な場合にも語彙力の他に、教養、関心、興味、知識、ユーモア、人柄に加え、見解、見識も問われる。時として誤解される場合もありうる。言語運用力に影響を与える日常の行ないも大切にしなければと改めて思う。

## ボーンヴィル —チョコレート工場の ために作られた村

経営学部  
安藤 聡

バーミンガムの郊外にあるカドベリー社（慣用的表記では「キャドベリー」）の工場は世界でも有名なチョコレート工場のひとつである。童話作家ロアルド・ダールがダービーシャー州のレプトン・スクールに在学していた頃、寮には時々カドベリー工場から開発中の新製品の見本が送られてきて、生徒たちがそれを試食してアンケートに答えていたという。ダールはサンプルが送られてくるたびに、秘密の研究所のような新しいチョコレートの「開発室」とそこで働く自分の姿を空想していた、と自伝『少年』に書いている。このよ

うな経験がのちに名作『チャーリーとチョコレート工場』（邦題は『チョコレート工場の秘密』）を書く動因となったのだ。

カドベリー社は1824年創業で、当初はバーミンガムの街中にあり紅茶と珈琲の卸売りをしていた。創業者ジョン・カドベリーは敬虔なクエイカー（フレンド教会）の信者で、18世紀の終わり頃に絹商人として故郷のエクセターからこの地に移り、のちの1831年にチョコレートとココアの製造を試みる。1839年に次男ジョージが生まれたが、主にこの次男が長じて巨大なチョコレート工場とボーンヴィルの村を作り上げることになる。

当時のバーミンガムは急速な工業化、都市化が進んでいる最中だった。肥大化する街が生み出す膨大な富は一部の資産家にもみ独占され、労働者たちはまさにディケンズの小説に描かれているような貧困生活の中に放置されていた。少年時代のジョージ・カドベリーはバーミンガムの街でこのような労働者の惨状を目の当たりにして、彼らに清潔で安全で真っ当な仕事と住環境を与えたいと考えるようになったという。一方でその当時、バーミンガムの街の周囲には典型的なイングランド中部の美しい田園がまだ残っていた。19世紀末から20世紀初頭にかけてこの地で幼少年時代を過ごした J. R. R. トルキーンもまた、その頃見た田園風景に靈感を得て『ホビットの冒険』や『指輪物語』の世界を描いている。カドベリーは理想的な職住環境を創造するのにこの田園を活用できないかと

考えた。

1861年に父親から事業を引き継いだジョージと兄リチャードは、1872年に食品製造時の混合物に法的規制が加えられたのを機にココアの改良に着手し、純粹素材のみを用いたココアを製造して販売した。こうして親子二代で完成させたカドベリー印のココアとチョコレートは好評を博し、そこから得た資金でカドベリー兄弟はバーミンガム南郊に14.5エーカー（約58600m<sup>2</sup>）の土地を購入し、そこに大規模な工場と従業員のための住宅地を建造することにした。ここは運河と鉄道が近くを通っていることから交通の便もよく、仕事と生活のいずれの場としても理想的だった。1879年1月に建設を開始し、工場はその年の内に完成した。近くをボーン川が流れていたため、その 'Bourn' に「町」を意味するフランス語 'ville' を付けてこの土地を「ボーンヴィル」と命名した。

当初はこのボーンヴィル村の住宅地には役職者のための18棟のみが建てられたが、20世紀初頭までにボーンヴィルはひとつの村、あるいは小さな町と言うべき規模にまで発展した。家屋の建蔽率を25%以下と定め、住民たちが広い庭でガーデニングや野菜栽培を楽しめるようにしたばかりでなく、家屋を舗道から少なくとも20フィート（約6m）、また向かいの家から少なくとも82フィート（25m）離すようにした。建ち並ぶ家並みは敢えて統一感を出さず、多様なデザインの家を不規則に配置している。このことによって風景に変化と対照がもたらされ、周囲の田園とも自然に調和するようになった。敷地内にあった古い樹木はなるべく残し、道路沿いには新たに植樹した。また1327年に建てられたハーフトインバー様式の「セリー・マーナー」を近隣から敷地内に移築し、古き良き時代のイングランドの村の雰囲気醸し出すことに成功している。商店街もこの様式を模した造りになっている。ボーンヴィルの住宅は当初、999年の借地権つきで分譲されたが、あまりに好評だったため価格を吊り上げて転売する者が続出したので、ほどなくカドベリーは方針を転換し、普通の賃貸住宅とした。これらの住宅にはカドベ



カドベリー・ワールド



カドベリー・ワールドの入口とボーンヴィルの教会

リー社の従業員でなくとも入居できるようになっている。1914年の時点で、全住民の中に従業員が占める割合は41%だったという。1905年に最初の学校が完成した後、村には複数の学校が設立され、また1925年からは若い従業員のための成人教育も行われている。

兄リチャードは1899年にエジプトを旅行中、エルサレムでジフテリアを患ってそのまま帰らぬ人となった。だがその後も弟ジョージは若い建築家 W. A. ハーヴィーと組んでボーンヴィルを発展させ続ける。村の中央に緑地 (village green) を作り、その中心に集会所 (現在では観光案内所を兼ねている) として中世の毛糸市場を模した小さな建物を配置した。住宅地と商店街、そして緑地が出来上がっても、教会とパブがなければイングランドの村、あるいは町として完全とは言えない。カドベリーは緑地の一面にクエイカーの礼拝所を、また商店街を挟んだ向こう側にイングランド国教会 (アングリカン) の教会を建てた。後者は1912年に基本的な部分が出来上がり、カドベリーの死後3年を経た1925年に全体が完成した。イタリアのロマネスク様式を模した赤茶色の煉瓦の教会は、他のアングリカンの教会とはいささか趣が異なっている。一方のパブは宗教上の理由で (何しろクエイカーなので) 設置することができないゆえ、この意味ではボーンヴィルはイングランドの村として永遠に完成しないということになる。

1900年に村の管理運営と開発を行うためのボー

ンヴィル・ヴィレッジ・トラストが発足した。現在では1000エーカー (約4 km<sup>2</sup>) の土地に7500世帯、25000人が住むこの村を一括して管理しているばかりでなく、このトラストはバーミンガムの街の南に隣接するウースターシャー州に11の農場を所有し、その総面積は3000エーカーに及ぶ。また2005年には、街の北側のシュロップシャー州テルフォードに、第二のボーンヴィルとも言うべき新しい住宅地が完成した。

1902年にカドベリーはボーンヴィルの住民の生活水準の実態を明らかにするために、この村に住む6歳から12歳までの少年少女の身長と体重と、バーミンガム市街地の特定の地区 (フラッドゲイト・ストリート) の同年齢の少年少女の身長体重を調査した。その結果は、ボーンヴィルの少年の体重が平均で71.8ポンド (約31.3kg) であるのに対してフラッドゲイト・ストリートの少年のそれが63.2lb (約27.5kg)、同じくボーンヴィルの少女の平均が74.7lb (約32.5kg) に対してフラッドゲイト・ストリートの少女が65.7lb (約28.6kg) だったという。現在のように肥満が国民的な問題になるような時代ではなかったゆえ、体重がより重いということはそれだけ栄養摂取状態がよく、健康な状態であると考えてよい。身長についても、ボーンヴィルの少年少女の平均の方がフラッドゲイト・ストリートのそれよりも2~3インチ (5.1cm~7.6cm) 高かった。尤も、フラッドゲイト・ストリートというのはその当時、バーミンガムの労働者が住むスラムの中でも特に貧しい地区だったらしいので、このデータの解釈には慎重になる必要があるのかも知れない。だが、1914年から19年までの住民の死亡率を比較した場合にも、ボーンヴィルが人口1000人に対して7.7人だった一方で、バーミンガム全体では1000人当たり13.7人だったという。労働者に理想的な住環境を与えるというカドベリーの当初の目的は成功しているのである。

ボーンヴィルのカドベリー工場には現在、「カドベリー・ワールド」という博物館あるいは遊園地のようなものが併設されている。私はこの中に

入ったことはないのだが、ここのサイトの説明と、ここに行った人のブログなど（例えば「中田英寿オフィシャルホームページ」の2006年3月9日の日記）を読んだ限り、おおよそ次のような内容だ。まずチケットを購入するとチョコレートバーがもらえて、それを齧りながら（1）カカオ豆の歴史、（2）カカオ豆がヨーロッパに伝来した経緯、（3）カドベリー社史、についての展示を見たのちに実際に工場でチョコレートが作られているところを見学し、試食コーナーや記念撮影コーナーを経て過去半世紀にわたるカドベリーのテレビCMが見られるシネマに至る、ということらしい。ちなみに入場料は2007年12月現在で大人13ポンド、学生・老人10ポンド（本稿執筆時の換算値で約2350円）、子供9ポンド95ペンスである。東京ディズニーランドなどと比べれば確かに安い、単なる工場見学だと思えばかなり高い。年間パスポートもあり、これは大人33ポンド80ペンス（学割はないらしい）だから、三回（学生は四回）行けば元が取れる。またここにはカドベリー製品を特価販売する店舗やカフェなどもあり、ここまではチケットを買わなくても入ることが出来る。

カドベリーの製品と言えは1905年から製造・販売され続けている定番中の定番である「デアリー・ミルク」という板チョコが有名だが、これに干し葡萄とアーモンドが入った「フルーツ&ナッツ」の方を私はより好む。ダールの『少年』に記されているレプトン・スクール時代のエピソードに次のようなものがある。奇人の数学教師コーカーズ先生は「数学ほど退屈なものはない」と嘯いて、いつも授業中にクロスワードやゲームばかり教えていた。この先生はある日、一枚のティッシュペーパーを取り出して見せ、これを50回折りたたんだら厚さはどれくらいになるか、と問いかけた。生徒らは当てずっぽうに24インチ、5ヤードなどと答えたが、正解者は皆無だった。正解は「地球から月までの距離」とのことで、先生は珍しく黒板に数式を書いてそのことを証明したという。この時、正解者がもらえるはずだった賞品は、カドベリーのフルーツ&ナッツの巨大板チョコだった

らしい。

2007年夏のイギリスセミナーで、確かロンドンに到着して3日目だったと思うが、何人かの学生と駅前のスーパーに行ったときのこと、私は例によってフルーツ&ナッツを買おうとしていた。そのとき傍らには二人の女子学生がいたのだが、一人がデアリー・ミルクを買うべきかどうか逡巡していた。するともう一人が、「この会社のは全部おいしいから大丈夫」と断言した。英国に来て正味二日のうちに、すでに彼女は何種類かのカドベリー製品を食べていて、しかもそのすべてが美味だったということらしい。ちなみにこの時点で私はまだ彼女らに、カドベリー社をめぐる蘊蓄を一切語っていなかった。

## ランニングホームラン

経営学部

田川 光照

今年の大リーグ・オールスター戦（7月11日）でのイチローの活躍はすごかったですね。なにしろ、3打数3安打、しかもその1本が78年の歴史をもつ大リーグの球宴で初めてのランニングホームラン、おまけに MVP まで取ってしまったのですから。

ところで、この「ランニングホームラン (running home run)」が和製英語だということを、皆さん、ご存知でしたか？ 恥ずかしながら、筆者は知りませんでした。オールスター戦の中継を見ていませんでしたので、結果を知るために、<http://sportsillustrated.cnn.com/> にアクセスしたところ、次のように書かれていたのです。